



# A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetics

秋田, 喜美

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2009-03-25

(Date of Publication)

2009-12-22

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4724

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004724>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 秋田 喜美  
博士の専攻分野の名称 博士 (学術)  
学 位 記 番 号 博い第 4724 号  
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当  
学位授与の日付 平成 21 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

**A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and lexical Properties of Mimetics** (日本語音象徴語文法：擬音・擬態語の類像 的・語彙的特性への理論的アプローチ)

審 査 委 員

主 査 教 授 松本 曜

教 授 岸本 秀樹

大阪府立大学人間社会学研究科教授 Lawrence Schourup

日本語音象徴語文法：  
擬音・擬態語の類像的・語彙的特性への理論的アプローチ

秋田 喜美

069D703H

文化科学研究科 文化構造専攻 言語文化論

和文要旨

本研究は、日本語における音象徴語（擬音・擬態語）の意味・音韻形態・統語の理論的分析により、その一般言語学的重要性を探る。全体として、音象徴語における音韻形態レベルおよび統語レベルの類像的写像関係とその語彙的意味（あるいは語彙的類像性）への依存性を主張する。

第2章：先行研究

前世紀における日本語音象徴語の研究は、その特殊性の辞書的記述を第一の目的としていた。例えば、日本語音象徴語には分節音・音韻形態と描写対象の間に有縁の関係が見られるという音象徴現象が体系的に確認されること、重複形や接尾辞形といった特徴的な音韻形態が存在すること、また副詞だけでなく動詞・形容詞等としても実現しうることが記述されている。しかし、今世紀に入り、言語学・心理学においてその理論的重要性が指摘され始めている。本論は、第I部でそうした音韻形態・音象徴的特性による音象徴語の語彙範疇的成立基盤を、第II部でその文法機能を決定する意味的条件を考察することで、音象徴語研究からの理論的貢献を目指す。

第3章：理論的枠組

そうした目標に向け、本研究は幾つかの機能的・認知的枠組を採用する。まず、音韻形態論に関しては、Goldberg (1995)に代表される構文文法の考え方を応用することで、Booij (2004)等により着手されている構文形態論の理論的発展に寄与する。統語論に関しては、Role and Reference Grammar等の機能主義的統語論が想定する意味・統語間の類像的写像関係に着目する。意味論に関しては、プロトタイプ範疇論の知見を一部導入する他、全体として認知的視点を持つ。

第I部：音韻形態

第4章：音象徴語の範疇規定

音象徴語の規定問題は、日本語のみならず他言語においてもしばしば取り沙汰されてきた未解決の課題である。ところが、殆どの日本語音象徴語が「きゝらきら」(CV<sup>^</sup>CV-CVCV)や「ふんわり」(CVCCV<sup>^</sup>ri)のように有限個の音韻形態鑄型の何れかを取るという事実は、当該範疇における音韻形態的条件の強さを示唆する。本章では、まずそうした鑄型の満足を要因として有意味語・無意味語の「擬音・擬態語らしさ」を日本語母語話者に判定させた。その結果、判定には連続的推移が観察され、また鑄型の満足を大きな判定基準であることが判明した。このことから、日本語音象徴語は鑄型条件という強い典型条件を有する境界の不明瞭なプロトタイプ範疇を成すと結論できる。

次に、同じく鑄型条件を基準に作成した無意味語の大小・明暗・硬軟に関する音象徴の判定実験を行った。結果、子音の清濁についても母音の高低についても、鑄型の満足不満足（音象徴語らしい語／らしくない語）で顕著な差は見られなかった。しかし、無意味語を文に入れ具体的な指示的意味（例：歩行速度）を設定してやると、鑄型を満足する語の方が有意に大きな音象徴のコントラストを見せた。即ち、音象徴語の音韻意味論的特殊性はその鮮明な語彙的意味に起因するということである。

第5章：音象徴語の音韻形態の構文的特性

音象徴語の音韻形態鑄型には、幾つかの構文的特性が見られる。まず、その意味には特筆すべき予測不可能性が指摘できる。例えば、強調副詞「うっとり」の心理的意味は、同属語の「うゝとと」からも、他の強調副詞「すっかり」「ずんぐり」からも予測し切れない。この高度な非合成性は、例えばbakerの意味<パンを焼くことを職業としている人>が単なる“bakeの意味+動作主性”ではないように、形態論的構文一般の特徴と考えられる。同時に、動詞の意味と構文の意味より合成的に全体の意味が得られるとされる項構造構文との重大な相違点となりうる。

また、音象徴語の各鑄型には特定の意味との体系的な対応関係が観察される。CV<sup>^</sup>CV-CVCVとCVCVX（例：ころっ(と)、ころん(と)、ころり(と)）は、それぞれ継続性・瞬間性というアスペクト特性と類像的に強く結び付く。一方、強調副詞形はそれらの鑄型では表せないような（しばしば一般副詞的な）意味機能と結び付くため、先程の予測不可能性の好例となる。更に、これらの音韻形態構文には意味拡張（例：CV<sup>^</sup>CV-CVCVにおける<重複> → <持続>）や特殊化（例：CVCVX → CVCV<sup>^</sup>ri）といった項構造構文に共通するネットワーク性が見られる。各音象徴語は、

そうしたネットワークを資源に、その語彙の意味に最も合致する構文的意味を有する鋳型を取っているのである。音韻形態鋳型の持つこれらの構文的ステイタスは、日本語の巨大な音象徴語彙システムを支える骨幹と考えられる。

## 第II部：形態統語

### 第6章：日本語音象徴語の文法機能

日本語音象徴語は副詞・動詞・形容詞・名詞という複数の文法範疇に跨がるが、どの語がどの範疇に属するかに関する妥当な一般化は提出されていない。この問題は、音象徴語の語彙の意味を“語彙的類像性の階層（臨時的擬音語＞擬音語＞擬態語＞擬情語＞一般語）における一般語からの逸脱の程度”として捉えることで解決できる。

擬音語は副詞となるのが基本であり、動詞・形容詞・名詞といった範疇には入りにくい。結果として、この種の音象徴語は主節の核（述語とその項）としては機能しにくい（例：犬がわんわん {＊した／吠えた}）。一方、擬情語などは動詞・形容詞・名詞という範疇にアクセスし易く、副詞には比較的なりにくい。結果として、主節の核への実現はし易いが、周辺（付加詞、間投詞）への実現はやや難しい（例：舞はわくわく {した／?期待した}）。この一般化の背後には、図式類像的な意味・統語写像が存在すると考えられる。即ち、音で音を描写する擬音語のように、類像性が高くその分一般語から逸脱した語ほど、統語的にも中心部から逸脱し易い。逆に、音で抽象事象を描写する擬情語のように、類像性が低く比較的一般語に近い語ほど、統語的中心部に実現され易いと言える。この意味・統語間の類像的写像モデルは機能主義的統語論と共通性を持ち、音象徴語文法の一般的側面と見なすことができる。

### 第7章：音象徴語の文法機能の通言語比較

前章の写像モデルは、他言語の音象徴語への適用可能性より後ろ盾を得る。音象徴語の文法的特性は言語内のみならず言語間でも様々である。ところが、何れの言語についても、類像性階層上のどこかで文法的区別をしているという点は共通している。例えば、韓国語の音象徴語は、日本語のそれ同様、類像性階層上の擬態語の中間辺りで文法機能的区別を見せる。一方、ダガリ語（ニゲル・コンゴ）やカンベラ語（オーストロネシア）の音象徴語は、常に統語的周辺部への実現となるため、階層における音象徴語と一般語の間に文法的区別が存在すると言える。また、擬音語のみに周辺的実現を許すハンガリー語は、擬音語と擬態語の間で区別を行っている。英語、スウェーデン語、フランス語では、音象徴語は基本的に主節の核として機能しうるが、高度に類像的な臨時擬音語等にはそれがやや難しいという点で、類像性階層の一番高い位置

で文法的区別をしているようである。このように、言語間の音象徴語文法の違いは、類像性階層を文法的に切り分ける位置の違いとして捉えられる。

興味深いことに、この記述法は音象徴語文法における含意関係を浮き彫りにする。即ち、以下のような普遍的仮説が導き出される：ある言語において、ある意味タイプの音象徴語が主節の核として実現可能であれば、それより類像性の低い語にもそれが可能である；逆に、ある意味タイプの音象徴語が主節の周辺に実現可能であれば、それより類像性の高い語にもそれが可能である。この含意関係は、本モデルにおける“非典型的な語彙項目は節構造の周辺部へ”という類像的な写像関係に動機付けられている。どれほど類像性の高い語を「非典型」と見なすが言語により異なるのである。

このように、本研究は、辞書的記述への志向が顕著であった先行研究とは異なり、音象徴語の言語的特性を一般理論の枠組で考察するものである。

## 論文審査の結果の要旨

氏 名	秋田喜美	
論文題目	A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetics	
要 旨		
<p>この研究は、「きらきら」や「がちゃん(と)」といった日本語音象徴語(擬音語・擬態語・擬情語)の意味・音韻形態・統語を、理論的・実証的に考察したものである。従来多くの音象徴語研究が記述的な傾向のものであったのに対し、本研究は一般言語理論との関連で音象徴語を考察する。また、極めて実証的な研究手法を取り、Kakehi, Tamori &amp; Schourupが編纂した辞書に含まれる膨大なデータの検討と、心理学的な実験の結果に基づいて議論を展開する。この二点において、この研究は他に類を見ない優れた論考となっている。文章は、ところどころ意味が取りにくい箇所もあるが、全体としては優れた英文で書かれている。以下、各章の内容を紹介した上で、それぞれに関して論評する。</p> <p>1章と2章では、音象徴語についてのいくつかの基本的な事項を論じている。その中で重要なのは、音象徴語の意味に二つのレベルを想定する点である。一つは「音象徴的意味」と呼ばれるもので、これは、例えば「ごろごろ」を構成する/g/や/o/という分節音が音象徴的に表す&lt;大きい&gt;などの意味や、CV<sup>1</sup>CV-CV<sup>2</sup>CV という音韻形態が表す&lt;継続性&gt;といったイメージの意味の総体である。もう一つは、この抽象の意味を含む、各音象徴語の語としての意味、即ち「語彙的意味」で、例えば、「ごろごろ」における&lt;大きな物体が継続的に転がるさま&gt;である。また、「語彙的類像性 (lexical iconicity)」という概念を、語の形式と語彙的意味との関係の直接性・有縁性を指すものとして用いる。これには程度が認められ、それにより、「臨時的擬音語&gt;標準的擬音語&gt;擬態語&gt;擬情語&gt;一般語彙」という階層が設定される、とする。</p> <p>3章では、この研究における理論的な立場が説明される。音象徴語の音韻形態的側面(第一部)に関わる構文文法的形態論(Constructional morphology)と、統語的側面(第二部)に関わる機能的統語論(functional syntax)が解説される。前者の理論は以下の議論で重要な役割を果たしているのに対し、後者の理論への依存度は低い。しかしながら、おおむね妥当な(根拠のある)理論的選択がなされていると言える。</p> <p>続く第一部(4,5章)では構文文法の枠組において音象徴語の音韻形態的側面が扱われる。まず第4章で論じているのは、「音象徴語」の定義における音韻形態的な特性の役割である。この研究が注目するのは、既存の音象徴語の99%が15個の鋳型(例:CV<sup>1</sup>CV-CV<sup>2</sup>CV, CVCCV<sup>1</sup>r<sup>2</sup>)のいずれかにあてはまる点である。このことは、音象徴語が「有限個の音韻形態鋳型のうち一つを満足する」という条件により規定されることを示す。この条件の重要性の論証として、心理学的な実験結果が紹介される。鋳型を満足する無意味語と満足しない無意味語の音声を用いて、その「擬音・擬態語らしさ」を日本語母語話者に評定させる実験を行い、鋳型の満足が音象徴語たるための典型条件の一つであることが示される。この章の考察では、音象徴語の定義における意味の類像性の役割をやや低く見ている嫌いがあるが、音象徴語を定義する要因として音韻的な側面に光を当て、また、音象徴語にプロトタイプの構造があることを指摘した点は高く評価できるものである。</p>		
主査記載 氏名・印	松本 曜	

また、第5章では、音韻形態的な鋳型(template)という概念を元に、構文文法的見地より音象徴語の意味を考察している。音象徴語の語形成に関しては、これまで語根に接尾辞「つ」「ん」「り」、強調子音等を付加するという派生説が主流であった。ところが、「てくてく、\*てくつ(と)、\*てくん(と)、\*てくり(と)」という例が示すように、こうした「派生」には多くの穴が存在する。このような現象は、語をどのように形成するかではなく、語がどのように構成されているか、という観点から形態論を考える構文文法的な考え方を支持するものであるとする。そして、その立場から音象徴語の音象徴的意味が考察される。特に考察されるのが、構文としての鋳型と、その意味的ネットワークである。まずは、鋳型には意味があり、一部の鋳型ではそれが特定のアスペクト的特性である点が指摘される。さらに、一部の鋳型に多義性が認められること、鋳型同士がさまざまな形で関連づけられることを主張する。これらの観察に基づき、鋳型が多義性のリンクや部分性のリンクなどによってネットワークを構成しているという主張がなされる。この章の論考は最新の言語理論に基づくものであり、提案は斬新かつ独創的であると言える。

第二部(6,7章)では機能主義(functionalism)的な観点から音象徴語の統語が考察されている。まず、6章では、日本語音象徴語の形態統語的実現の可能性を左右する意味的制約を観察することにより、これまで成し遂げられなかった新たな一般化を提示している。主に「する」を伴う動詞は、ほぼ全ての擬音語(例:\*げらげらする)と約半数の擬態語(例:\*てくてくする)では形成できない(あるいは明らかな育児語的響きを生じる)が、全ての擬情語(例:わくわくする)と約半数の擬態語(例:うろろうする)では形成できる。この状況は、語彙的類像性階層に基づき、「類像性の高い音象徴語は動詞を形成できない」という反類像性制約により一般化される、とする。また、音象徴動詞には、反他動性制約と呼ぶ統語的制約も観察される。これは、「他動性の高い音象徴動詞は形成できない」というものであるが、他動性の高い事象は顕著な音を伴い易いという現実的な相関より、反類像性制約と関連付けられる、とする。この章の内容も論旨は明快であり、妥当なものである。

7章では、6章の音象徴語の範疇的特性を文法機能レベルで再考察し、それに基づいて世界の諸言語の音象徴語の統語的な具現化が、語彙的類像性の階層性から説明できるとする。この章で展開されている議論はスケールの大きなものではあるが、検討している言語が限られており、また、一つ一つの言語のデータも限られている。しかしながら、大規模な検討に耐えうる、興味深い仮説を提示していることは間違いない。

このように、本研究は日本語音象徴語の重要な問題に関し、近年の一般言語学における新しい理論展開を踏まえて明解な回答を提示しており、それは、言語理論上も興味深いものである。また、その議論には斬新さがあり、文献の検討も網羅的である。異なる領域に関して異なる理論を用いている点は評価が分かれるところであるが、本研究のように音象徴語の異なる側面を幅広く扱う際には現実的な選択といえる。

以上の審査をもとに、本審査委員会は全会一致で論文提出者 秋田喜美 が博士(学術)の学位を授与されるに足る資質を有すると判断した。

### 審査委員

区分	職 名	氏 名
主 査	教授	松本 曜
副 査	教授	岸本秀樹
副 査	大阪府立大学 教授	Lawrence Schourup